

ミュージアム 通信

江戸から人気の ロングセラー！ 蚊遣り豚の誕生

[小企画]

館藏品紹介・限定ミニ展示のご案内
「古裂百花ー江戸の染織模様ー」

[連載]

第六回 未来の匠
ー次世代へ「技」を受け継ぐ人たちー
九谷焼陶芸家

「夕立景」(部分)・歌川国貞 画・山口県立秋美術館・浦上記念館所蔵
江戸時代の蚊遣りは、草木を燻し、煙で蚊を追い払った。



江戸から人気のロングセラー！蚊遣り豚の誕生

元祖癒し系?!
夏の必需品

もうすぐ一年で最も躍動的な季節がやって来る。夏祭り・七夕・海水浴・盆踊り・花火大会等々：何かと屋外に出る機会も多いが、日本の夏には残念ながら「蚊」はつきもの。ひとたび蚊に刺されると、痒さでせつかくのイベントも楽しさが半減してしまわらう。そんな時、蚊除けのアイテムとして欠かせないのが、蚊取線香である。蚊取線香を使うためには、陶器等の入れ物が必要だが、これを「蚊遣り」という。

江戸時代、江戸の山の手あたりは蚊が湧くのが早く、本所・浅草は名物と言えるほど蚊が多かったらしい。蚊帳は四月ごろから吊り、十一月に入りやっとはずせたくらいである。

「蚊遣り」は蚊遣り火を焚くもので、夏の夕暮れ時に、家の中に蚊が侵入する

のを防ぐため庭先などで使用された。

近頃は蚊遣りと聞いてもピンと来ない人もいるかもしれないが、口を大きく開けたブタの形をした筒型の容器には見覚えがあるだろう。あのユーモラスな顔をしたブタの蚊取線香入れは、その名の通り、「蚊遣り豚」といい、今や夏の風物詩として定着している。

犬や猫はないけれど、 達磨はあります

現代の蚊遣りは、蚊遣り豚から派生し犬形や猫形等、様々見かけられるが、では、この蚊遣り豚、一体いつからあったのか。その歴史は意外と古く、江戸時代後期にはすでに原形があったようである。

当時の川柳に「蚊遣り豚」が詠まれており、このほか「蚊遣り達磨」も確認されている。これらが江戸の人々に愛用されていた蚊遣りの形である。

左の写真は、一九八九年に発掘調査された新宿区内藤町遺跡から実際に出土した豚形の蚊遣りである。内藤町遺跡とは、江戸時代において高遠藩内藤家が下屋敷として使用していた、現在の新宿御苑一帯を示す。

この蚊遣り豚は、全長三〇四mm、高さ二二〇mmで、現代のものと比較するとかなり大きい。『内藤町遺跡』の発掘調査報告書によると、「これは、明治初期以前はまだ蚊取線香がなく、萱の枝や、藁、蓬、木綿、枯葉、鋸屑、粉殻、米糠などを燻して使用していたためである。このため一般の火鉢程度以上の大きな容量を必要としていた。」とある。

蚊取線香の原料となる除虫菊が日本に入ってきたのが、明治初年（一八六八）なので、それまで日本に除虫菊はなかった。そのため江戸時代の蚊遣りには殺虫効果はなく、煙の出る草木などを燻して、その煙で蚊を追い払っていた。

日本で除虫菊の栽培が始まったのが明治一八年（一八八五）以降とされ、蚊取線香が実際に使われ始めたのが明治二〇年代（一八八七）からということなので、その頃から蚊遣り豚は小型化してきたようである。



内藤町遺跡から出土した蚊遣り豚・新宿歴史博物館所蔵



蚊遣り火の煙で煙たそうにしている女性。「風俗三十二相 けむさう」・月岡芳年画・山口県立萩美術館・浦上記念館所蔵

ような大きく口を開けた豚形ではなかった。大正四年六月十日の東京朝日新聞に「蚊よけ」の広告が掲載されており、ここに「豚器」という名称で、渦巻状の蚊取線香とともに内藤町遺跡出土のものと同様にした口のすぼまった蚊遣り豚のイラストが描かれている。

どうやら、現在の口を大きく開けた蚊遣り豚になるのは、昭和に入ってからのようなのだ。
こうして「豚」は生まれた
今とは若干、形が違っていたとはいえ、この「蚊遣

り豚」、または「蚊遣り達磨」の形はどうやって生まれたのだろうか。蚊遣りが出現する以前は、蚊を燻すのに火鉢・焜炉・七厘などを用いていた。余談だが、火鉢は冬だけでなく、夏も大活躍していたのだ。しかし、これらは火の粉が舞い上がってしまうため主に庭先で使用し、家の軒先にいる蚊が室内に入ってくるようにしていた。

一方、室内で蚊除けの道具として用いてきたものといえ、浮世絵などの絵画資料から、火もらいや瓦灯、手焙りなどが挙げられて

いる。いずれもドーム状の屋根が付いており、火の粉が舞い上がることはない。

さて、唐突だが、次の写真には内藤町遺跡から出土した摘み付火もらいである。



新宿区教育委員会蔵

ではしばらく、皆様にご覧いただきたく、観察していただきたい。そして、少々縦長に伸ばし、横に倒してみよう。

段々、ドームの上についている摘みが、ブタの鼻のように見えてこないだろうか。これに四本の足を付け自立できるようにし、焚口を胴部から尻部に変え、鼻と目の部分から煙が出るように穴をあげ、また紐で上から吊るすためのミミを、耳と尻尾に見立てて作れば立派な蚊遣り豚の出来上がりである。

次の写真も内藤町遺跡から出土した把手の付いた火もらいだが、今度はこれを、そのまま少し潰し、下膨れにした状態を想像してもらいたい。



新宿区教育委員会蔵

いかがだろうか。達磨のような、もしくはおかめのようなふくよかな顔が現れてこないだろうか。

おそらく、江戸時代の人々も、火もらいなどを蚊遣りとして使っているうちに「豚」や「達磨」を連想したのでろう。犬形や猫形の蚊遣りにはならなかった理由がお分かりいただけただろうか。

今に生きる

「江戸のかたち」

実は、蚊遣り豚については、これまで研究者の間で「なぜ豚形なのか」という

議論が多くなされてきた。蚊取線香ができるまでの蚊遣りは今よりも安全ではなかったため、「火伏せの神」として信仰の対象になっていったイノシシの形を模したのだという説や、ブタは「水神の使い」と言われているからだという説もある。

だが、今日知られている江戸時代の美術・工芸品などを見ても、江戸の豊かな発想力やデザイン力は、現代と比べても見劣りすることはなく、実用品でありながらインテリアを兼ね備えた品々は数多い。蚊遣り豚が誕生した理由も、そんな江戸人のシンプルな遊び心の中にある。

※1 蚊遣り豚の誕生には諸説あり、愛知県常滑市の養豚場で蚊遣りとして使っていた土管が発祥という説もある。
※2 新宿区四谷二丁目遺跡からも出土している(上半身のみ)。

館蔵品紹介・限定ミニ展示

「古裂百花—江戸の染織模様—」

2012年6月16日(土)～7月16日(月・祝)

経巻や和歌、漢詩書、ていませす。

消息などの巻子本や冊子本から、その一部を切り取って蒐集し、折帖に仕立てたものを「手鑑」といいます。古筆や名筆の鑑賞に、また筆跡鑑定などを目的に編集された作品集のようなものです。この鑑賞形態は、

お楽しみください。

桃山時代以降、江戸時代にかけて流行し、古筆切のほか、名物裂などの手鑑も作られました。それらは今日、美術館・博物館の蔵品として伝わっ

※この展示は、常設展内の一部で行いますので観覧料は無料です。



「古裂百華帖」・江戸時代後期・当館所蔵

次世代へ「技」を受け継ぐ人たち

九谷焼陶芸家

田村星都さん

数多くの伝統が息づく石川県で、九谷焼制作に携わる田村さん。家に伝わる「細字」の技法を今に伝えるながらも、独自の世界を作り出す彼女の魅力を紹介します。

九谷焼毛筆細字の技法は、繊細華美な上絵付けに見合う表現として、器の内側に漢詩文を描き付けたのが始まりとされる。田村さんの実家は、毛筆細字の第一人者と言われる小田清山を祖とする。元来、九谷焼は分業体制。当時は、器体に極小の文字(細字)を描くことを専門とする職人の家だった。明治期に、謡曲・百人一首など日本古来の歌を題材に仮名書による表現を加えるようになり、この万葉仮名が田村家に代々伝わる書体として、

洗練された技法とともに現代に受け継がれている。

生まれながら九谷焼に囲まれて育った田村さん。大学卒業後、企業に勤めたものの、それがかえって九谷焼、さらには家業の大切さを彼女に実感させることになった。退職し、九谷焼技術研修所で一から作陶を学び直した。研修所では成形も習得し、試行錯誤を重ねながらも、日々、細い筆を巧みに操る。



器にただひたすら細かい文字を描く。利便性を優先する展開の早い現代

生活からはかけ離れた、気の遠くなる作業だ。しかし「手技の極みが凄みとなって現れている先代の作品を目の当たりにすると、時代を越えた九谷の魅力を感じる」と田村さんは話す。

左利きの彼女は筆順が通常と異なる。「左から右」の流れが基本の毛筆書の世界で苦勞も多いのではなからうか。しかし何度でも描くことで、文字の崩し方や自分で、文字の崩し方や自分らしい描き方を身につけたという。「文字には意味があるんです。歌の意味と文字の意味を汲み取り、器を使う場面を想像しながら描きます」実際に描いてみると器の雰囲

気と合わないこともある。作品の制作には、古典文学を読み解く読解力とデザイン力、そしてバラ



ンス感覚が要求される。

「生涯を通して技術を習得すべく、日々コツコツ描き続けていきます。早く一人前の仕事ができるようになり、そこに自分らしさを加えた、今までにない作品を生み出せたら嬉しいですね」

伝統と革新の狭間で揺らぐことない真つ直ぐな思いを笑顔で語ってくれた。

二〇一三年初春、伊勢半本店紅ミュージアムにて紅と九谷焼若手作家による「技のコラボレーション」企画を開催。二つの伝統の技の力を借りて、現代の方にも共感してもらえるような新たな世界を表現したいと話す田村さんも参加予定。

【陶窯田村】
<http://saijitamura.main.jp>

■新商品のご案内

伊勢半本店では、2012年5月17日より新商品「小町紅『千歳』白ゆり」(13,650円)を発売いたします。清楚で凛としたイメージを持ち、香り豊かで魅力的な「百合」をあしらったデザインは、大人のウェディングに、大切な方への贈り物に最適の一品です。



Since 1825 伊勢半本店 紅ミュージアム

●開館時間/11:00~19:00 ●休館日/毎週月曜日
(月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F

TEL&FAX: 03-5467-3735

東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehanhonten.co.jp>